まえがき

絵引の研究は、比較的長い歴史を持っています。約 40 年ほど前の財団法人日本常民文化研究所の時代に、日本中世の絵巻物を素材にして『絵巻物による日本常民生活絵引』（全 5 巻）が発刊されました。この研究所が神奈川大学に移管された後、2003 年度に採択された 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の中で、絵引研究は継承され、発展してきました。2008 年度からはその後継組織として非文字資料研究センターが設立され、絵引の研究も本センターに引き継がれました。

今回の奄美・沖縄の絵引は、『日本近世・近代生活絵引』の編纂の範疇に入ります。この範疇には、すでに北海道編、北陸編、東海道編があります。COE プログラムの拠点リーダーであった福田アジオ先生のグループが沖縄に行き、『琉球嶌真景』などの調査を行いました。それを受けて、今回の絵引編纂に取り組みました。本書の完成により、一応日本の北から南までの常民生活絵引を俯瞰することができるのではないかと思います。

『琉球交易港図屏風』（浦添市美術館蔵）は、近世における那覇港の繁栄ぶりを示す屏風絵です。多くの船が描かれています。まず、琉球から中国へ行く進貢船や接貢船が大きく描かれています。近世において、琉球と中国の間にこのような往来が盛んに行われていたことが示されています。それだけでなく、丸に十文字の薩摩の旗をなびかせている大型和船や天間船なども描かれ、その中には薩摩の武士の姿も見えるなど、薩摩との交流も描かれています。庶民の生活に関わる船として、漁師が乗るサバニや爬龍船競漕のハーリー舟、近海で物資を運んだ馬艦（マーラン）船なども描かれています。人物も多彩に描かれていて、琉球人の服装や髪形が分かるだけでなく、中国や薩摩の人が描かれ、国際色豊かな屏風絵となっています。

『八重山蔵元絵師画稿』は、絵師の習作ではありますが、石垣島の庶民生活を描いた点で大変興味深い画稿です。全部で 114 枚の絵がありますが、その中から 22 枚を選びました。当時の様子が生き生きと描かれていますが、とくに興味深いのは、大和（薩摩）商人や異国人が描かれていることです。ここでも、琉球の国際性が示されています。

『琉球嶌真景』には、奄美大島の生活が描かれています。奄美大島は、1609 年の薩摩の琉球侵攻を契機に琉球王国から薩摩藩に移管されました。ですから、この絵に描かれた爬龍船競漕や豚飼いなどの風習は琉球に似ており、相撲は大和相撲を取っています。また、八月踊りなどは奄美の文化が描かれています。このように、文化の多様性を見ることができます。

この絵引編纂は、渡辺美季先生が中心となって進めてきました。渡辺先生が参加していなければ、完成はできなかったと思います。また、得能壽美・富澤達三の両先生からも、大きなご協力をいただきました。深く感謝します。その他、執筆、編集に携わっていただいた先生方、ご協力下さったすべての方々に心より感謝します。そして、貴重な資料の使用をご許可下さった浦添市美術館、石垣市立八重山博物館、名護博物館、そして滋賀大学経済学部附属史料館と京都大学総合博物館に心より感謝申し上げます。

本書を多くの方に利用いただき、ご意見などを頂ければありがたいと思います。

2014 年 3 月

非文字資料研究センター『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編編纂共同研究代表
小熊　誠